教育目標　　進んで学ぶ子　なかよくする子　たくましい子

学校だより

新潟市立中之口東小学校 2025.12.19
第３９２ 号　児童数１１０名
ホームページ
https://www.kiranico.jp/

ほめる難しさ

校長　小森 康貴

今まで私が書いた学校だよりを読み返したところ、いつも最後に保護者の皆さんにお願いを書いていました。その中でも「お子さんをほめてください」というものが圧倒的に多かったです。きっと、困ったのではないかと反省しています。なぜかというと、ほめるのは難しいからです。ほめようと思っても同じことしか思いつかなかったり、恥ずかしかったりします。効果的に子どもの心に響くようにほめようとしてもなかなかうまくいきません。

私が教師になったばかりのころ、ほめる難しさを実感した出来事があります。

学級に１名、落ち着いて学習することができない子どもがいました。その子どもは、授業中、いつもイライラしていて、机の上は一面落書きでした。私との関係もあまりよくありませんでした。そのため、授業中は、いつも学習内容と異なることばかりしていました。

ある日、机間巡視をしていると、その子どもが、めずらしく国語のノートを一生懸命書いていました。私は嬉しくなり「〇〇さん、一生懸命ノートを書いていて素晴らしいですね」と言いました。その後、机間巡視を続け、もう一度その子どもの近くに行くと、その子どもは、ぼろぼろと涙を流して泣いていました。驚いた私は「大丈夫、具合が悪いのですか？」と声をかけました。すると「初めて先生がほめてくれた」と言いました。ほめられたことがうれしくて泣いていたのです。

私は、とても戸惑いました。その子どものよいところをいつも探していましたし、実際に何度もほめた記憶がありました。それなのに、その子どもは、私にほめられた認識がなかったのです。とてもショックでした。今までほめていたことは全く心に響いていなかったということです。

なぜ、心に響かなかったのでしょうか。２つの理由が考えられます。

１つは、本気でほめていなかったことです。その子どもとの関係をよくしたいという思いから、とりあえずほめようとしていただけだったのです。

もう１つは、その子ども自身がほめられる価値があると感じていることを見逃していたためです。例えば、自分がとても頑張ったときに「頑張ったね」と言われる場合と、自分があまり頑張ったわけでもないときに「頑張ったね」と言われるのとでは嬉しさは全く違います。その子どもがほめてくれるだろうと感じているタイミングをことごとく逃していたのだと思います。

結局、ほめるということは、相手に愛情を注ぐことです。相手をよく見て、何を思っているのか想像し、コミュニケーションをとることです。もしかすると、良好なコミュニケーションがとれていれば、ほめようと意識しなくても自然にほめているかもしれません。

そう考えると、毎日、お子さんにたくさんの愛情を注いでいる保護者の皆さんにとっては、ほめることは難しくないと思います。これからもお子さんをたくさんほめてください。